國語學會編輯

國語學

UNIVERSITY OF MICHIGAN
MAR 13 1958

31

FAR EASTERN 詩歌における音楽性について……時枝誠記… 1
SOUTHERN 文学研究の一課題として
アクセント推移の要因について…秋永一枝… 7
鹿児島(市)方言動詞の粗描……佐土原 果… 28
質問表現における文末助詞ゾについて…外山映次… 37
一近世初期京阪語を資料として
西沢一鳳と三都の詞考察……杉本つとむ… 47
一江戸詞を中心として
「古事記」のシ・オ・ホのかな……馬淵和夫… 61
玉篇と篆隷万象名義について……貞苅伊徳… 91
〔海外学説紹介〕
「修飾」に関する一学説について……佐々木 達…100
〔書 評〕
大野 晋 氏著
「日本語の起源」
(岩波新書1957年)を読む……村山七郎…105
松村明 氏著
「江戸語東京語の研究」を読んで……金田 弘…115
〔資料紹介〕
明治国語学史参考資料……時枝誠記…122
国語学会研究発表会発表要旨……125
新刊紹介・新刊書目……133
学会事業報告・学界消息・会員消息……141
国語学総目録（第21輯～第30輯）……145

武藏野書院刊行

STUDIES IN THE JAPANESE LANGUAGE

No. 30 September 1957

SPECIAL EDITION
RESEARCHES IN LINGUISTIC JAPANOLOGY 1956

CONTENTS

T. Tukahara : General Remarks ; Appendix : History of Japanese Philology
Y. Huziwara : Field of Dialectology.
K. Hukusima : History of Japanese.
T. Tukahara : Grammer.
T. Tukahara : Vocabulary and Meaning.
M. Okumura : Phonemes and Letters.
T. Tuzimura : Problems in National Language.
S. Isii : The Teaching of Japanese.
H. Kindaiti & Haga : Language in Life
K. Kurano : Some Doubts Concerning Prof. Tokieda's "The Position of a Proxy in Speech Act."
M. Tokieda : On Reading Mr. S. Osafune's "On the Criteria of *"Si"* and *"Zi."*

THE SOCIETY FOR
THE STUDY OF JAPANESE LANGUAGE
IN TOKYŌ UNIVERSITY

IBM 3725

7訛りは、(a)国訛り　(b)不純なコトバ（二ケ国以上の方言がまじる）に大別して考えられる。

8江戸商人の事を〈気転よく利て便利甚よろし此余商人にても物いひ叮嚀にしてすこしの物を売るにもふせふなる詞は遣わず夫といふが武家大屋方軽き形りにて出らるゝゆへ朝夕是に相手馴（ママ）しと思わる。〉と述べている。

9脚色余録（初篇中巻）・「浄瑠璃歌舞伎俗語注解の事」に〈けんもほろゝ・むちゃくちゃ・どさ草・破れ冠れじゃ畳んで仕舞〉などの劇場のコトバが俗家の常の詞となったと指摘し、又「伝奇作書・中古江戸三座通の詞の事」にも〈おべっか・楽屋落・首（縊切の事）・とんちき・はねた（馬鹿、又は打出）・鞘当（色事での不和）〉など二十五語程あげてそれらの一般化を述べている。

10安藤正次「国語史序説」を参照せよ。

◎文中特に断りないのは皇郷午睡よりの引用。

（一九五六・三・十　早稲田大学副手）

受贈図書雑誌目録

ACTA LINGUISTICA（第6巻第4号）　西川順土
日本紀古本考異　矢野文博
五十音図の現代的意義（抜刷）　関西大学国文学会
国文学　研究報告（第8号）　吾七・三月　山口女子短期大学
小林理学研究所報告（第17巻第1号）　吾七・三月　大分大学学芸学部
大分大学学芸学部　研究紀要（第6号）　吾七・三月　奥里将建
日本語系統論　吾七・六月　日本民俗学会
日本民俗学（第15巻第1号）　吾七・六月　クラブ尖塔
尖塔（第29号）　吾七・六月　国学院大学
国学院雑誌（第58巻第3号）　吾七・七月　日本文芸研究会
文芸研究（第26号）　吾七・七月　大阪市立大学文学会
人文研究（第8巻第6号）　吾七・七月　関西大学国文学会
国文学（第18号）　吾七・七月
日本文学（第6巻第7号）　吾七・七月　立命館大学人文科学研究所
立命館文学（第146号）　吾七・七月　日本ローマ字会
ローマ字世界（第506号）　吾七・七月　カナモジカイ
カナノヒカリ（第421号）　吾七・七月　日本音声学会
音声学会会報（第94号）　吾七・八月　立命館大学人文科学研究所
ローマ字世界（第507号）　吾七・八月　日本エスペラント学会
立命館文学（第147号）　吾七・八月
エスペラント（第38巻第8号）　吾七・八月

『古事記』のシ・オ・ホのかな

馬淵和夫

一

同様の題目の論文としては、すでに、池田毅氏「古事記における志斯の仮名遣について」（『国学院雑誌』第四十巻第四号・大号、昭和九年四月・六月）および永田吉太郎氏「古事記に於けるシ・オ・ホの文字遣について」（『国語と国文学』第百二十七号、昭和九年十一月）がある。いずれも、『古事記』が一音一字の原則で表記されているのに、この原則に反するかにみえるシおよびオ・ホのかなについて、それがいわゆる上代特殊かなづかいと関連があることをのべたものである。これらが昭和六・七年に続々とあらわれた、橋本博士・有坂博士・池上氏などの研究に刺戟されてでてきたものであることはあきらかであるが、まだそれらの研究の成果を十分にとりいれるにいたらなかったので、その結論はいまだ学界にみとめられていないかのごとくである。

池田氏にしても永田氏にしても、そのねらいは、シおよびオ・ホにおける甲乙二類の区別をみとめて、各類にはどの語とどの語がはいるかということを決定しようとするにある。これは昭和十年前後の特殊かなづかい研究の趨勢からして当然の態度である。しかし両氏の研究の結果によってあきらかなごとく、シ・オ・ホのかなには若干の混乱がみられるために、各語彙の分属の研究としてはそれほどすっきりしたものとはならなかった。これが現在まで両氏の説がまだ学界にひろくみとめられるにいたらず、有坂・池上両氏のモの区別の発見によって、「古事記にはモにも二類があった」とする通説にくらべて、不当な冷遇をうけてきた理由ではないかとおもう。勿論、有坂・池上両氏の発見は、古代国語に存在した母音調和の痕跡を指摘したという、よりおおきな収穫のために、さらに一層のかがやきをましたのに、池田・永田両氏の研究はそのバックになにもひろがりをもたなかったし、また、池田氏のごとくあらぬかたへ結論がそれたということもあるにはある。しかし、シ・オ・ホのかなにも、甲乙二種の区別が存在していたということは、単なる推測でなしに、実証されたものとして承認されてもよいのではないだろうか。すくなくとも、古事記がかきしるされたとき、若干の語において混乱はあったにしても、これらを別の音韻として意識することがあったことは否定できなかろうとおもう。

そこでここでは、昭和十年前後における特殊かなづかいの研究テーマであった「どの音に二種の区別があるか、そしてそれに属する語彙はどれどれか」という、いわば共時的観点をはなれて、「特殊かなづかいはどの様にして崩壊したか」という、いわば通時

的観点からみてみたい。そうすれば、『古事記』におけるシ・オ・ホのかなのつかいわけのみだれは、特殊かなづかいの崩壊のさきがけ（文献上にあらわれた）として、おもしろい問題を提供するにちがいない。また、シ・オ・ホのかなのつかいわけがあり、ある程度までそのただしい用法がきめられるならば、そこから上代特殊かなづかいやまたは上代語などの研究上に、在来の資料でかんがえられていたよりも、いくらかのあたらしい解明がなされるかもしれない。これらのことは、まず二種の音の区別が存在していたことの証明からはいらねばならぬから、その点では、池田、永田両氏の調査と重複することがおおいのはやむをえないが、研究の方向と方法においてはおのずからちがっているはずである。

なお、これらのかなに音韻的な区別がないものとして、用字法上からみていこうとした高木市之助博士「古事記歌謡に於ける仮名の通用に就ての一試論」（『吉野の鮎』一四四ページ）の様なものもあるが、同氏もみとめていられるごとく語学的な調査の方が優先するとおもうので、ここではふれないことにした。

二

まず、シのかなからはじめる。『古事記』中、シ（ジ）の音をあらわす字は、つぎの九種でそれぞれ（ ）内の様な用法上のきまりがある。

シのかな

斯（一般にもちいられる）	志（同上。固有名詞にのみもちいられる）			
0	0	1	序	上巻
2	51	53	中巻	
21	78	78	下巻	
1	76	84	計	
24	205	216		

紫（筑紫にのみもちいられる） 0 0 0 4
新（新羅にのみもちいられる） 0 0 4 0 9
色（色許にのみもちいられる） 0 4 0 5 9
芝（代名詞「し」にもちいられている） 0 8 5 9
1 0 1 1
1 12 6 14

ジのかな

士（一般にもちいられる）	0	0		
自（伊自牟・志自牟にのみもちいられている）	0	14		
	1	10		
	0	3		
	3	27		
	4			

（植松茂氏『古事記漢字索引』による）

師紫新色はそれぞれ固有名詞にのみもちいられた特殊な字であるから、一応除外してかんがえ、芝は一字のみであるから、これも別にし、濁音はあとから考察することにして、結局、斯と志の二字についてかんがえてみる。これは各巻とも大体同じぐらいずつもちいられているし、また一首の歌謡中混在しているのだから、編集の便宜上つかいわけたという様な痕跡はない。したがって、キヒミとおなじく音によってつかいわけたとする予想がたてられる。そこでまず、一方だけをもちいて混用のないものからみていく。このばあい、用例がすくないものは、正用であるのか、あるいは誤用の例のみであるのかはわからないということを一応念頭においておく必要はあろう。

（本文および丁数、行数は『訂正古訓古事記』により、検索には植松茂氏『古事記漢字索引』をもちいた。以下おなじ。）

1、混用のないもの

イ、斯

シル（知る・領る）15 多迦斯理（上三七ウ3） 布刀斯理（上三七ウ2） 布斗斯理（上五六ウ1） 多迦斯理（上五六ウ1） 多迦斯理（上五六ウ1） 多迦斯理（上五六ウ1） 多迦斯理（上五六ウ1） 多迦斯理（上五六ウ1） 多迦斯理（上五六ウ1） 多迦斯理（上五六ウ1） 多迦斯理（上五六ウ1） 多迦斯理（上五六ウ1） 多迦斯理（上五六ウ1） 多迦斯理（上五六ウ1） 多迦斯理（上五六ウ1）

理（上五六ウ二分） 布斗斯理（上六一オ7） 多迦斯理（上六一ウ1） 斯良爾（中二九ウ1）（中七三オ3）（中七三オ4） 斯良受登母（下七ウ2） 斯良牟登（下一二ウ7） 斯理勢婆（下一四ウ3）（下一四ウ5） 斯理奴倍志（下二二オ1）（この二語は同一語源とみた。） シク（重く・及く・敷く）6 追斯伎斯（上一三ウ4） 伊夜佐夜斯岐豆（中一二ウ3） 伊斯祁登理夜麻（下六ウ7） 伊斯祁（下七オ1）（下七オ1） 伊斯岐阿波牟（下七オ2）（この三語は同一語源とみた。） シロ（白）5 斯路岐多陀牟岐（上四〇オ1）（上四二ウ5） 斯良多麻能（上七一ウ5） 斯漏多陀牟岐（下七ウ1） 斯漏多閉（下三四ウ1） ハシ（梯）4 波斯多豆能久良波斯夜麻（下一一オ1）（下一一オ3） シ（自）4 斯賀（下六オ2）（下六オ2）（下一三ウ1）（下四三オ6）

○「芝賀」（下六オ4）は同語である。永田氏がこの一例を正用とし、「斯賀」の四例を例外とされたのはいかなるゆえか。

ヒシ（菱）2 比斯那須（中七一オ5） 比斯賀良（中七三オ3）
コシ（腰）2 許斯那豆牟（中五六オ6）（中五六ウ2）
サシブ（木名）2 佐斯夫（下六オ2）（下六オ2）
アシ（葦）2 阿斯訶備（上一オ7） 阿斯波良（中一二ウ1）
シモ（下）2 斯毛都勢（下二三ウ6） 斯毛都延（下三八オ4）
シリ（後）3 斯理都斗（中二九オ6） 美知能斯理（中七三オ7）（中七三ウ2）

固有名詞

ウカシ8 兄宇迦斯（中五ウ4）（中五ウ7）（中六オ4）（中六ウ1） 弟宇迦斯（中五ウ5）（中六オ4）（中六ウ7）（中七ウ3）

ウシノカミ2 宇斯能神（上一四ウ3）（上一四ウ5）

タシミダケ2 多斯美陀気（下三一オ5）（下三一オ6）

ロ、志

シコ（醜）3 予母都志許売（上一二オ4） 伊那志許米志許米岐（上一四オ2） 志祁志岐（中一二ウ2）

シギ（鴫）2 志芸和那（中七オ2） 志芸シヤゴシヤ4 盈盈引志夜胡志夜（中七ウ1） 阿阿引志夜胡志夜（中七ウ2）

シム（助動）2 志米岐（下四五ウ5）（同上分）

固有名詞

コシ10 高志（上二八オ3）（上三八オ3） 故志（上三八オ7） 高志（中一九オ2分）（中二八ウ6）（中二九オ3）（中三一オ2）（中三四オ2分）（中三八ウ5）（中六五オ7）

タギシミミ7 多芸志美美命（中一〇オ3） 当芸志美美命（中一一二ウ6） 当芸志美美命（中一三オ7）（中一三ウ3）（中一三ウ6） 多芸志比古命（中一六オ4） 当芸志比古命（中一六オ5） イヅシ7 伊豆志（中八一オ6分）（中八一オ7）（中八一ウ1）（中八一ウ4）（中八二オ6）（中八二ウ2）（中八二ウ7）

シヅウタ4 志都歌（下九オ4）（下一二ウ4）（下三三オ7）（下四〇オ6）

アヂシキタカヒコネ4 阿治志貴高日子根神（上五二ウ7） 阿

遲志貴高日子根神（上五二ウ2）（上五二オ3）阿治志貴多迦比古泥能加微（上五三オ5）

イトシ4　伊登志別王（中三三オ1）伊登志（中三三オ1分）伊登志和気王（中三四オ3）伊登志部（中三四オ4分）

カエシデ3　訶恵志泥命（中一六オ3）（中一六オ5）（中一六ウ2）

シジム3　志自牟（下二九オ4）（下四一オ2）（下四三ウ6）

カシヒ2　訶志比宮（中五九ウ4）（中六〇オ6）

シブミ2　志夫美宿禰王（中二二オ7）（中二三ウ3）

シナツヒコ2　志那都比古神（上七オ5）（上七ウ1分）

シギヤマツミ2　志芸山津見神（上一〇ウ3）志芸（上一〇ウ4）

タギシ2　多芸志（上五六ウ6）（上五六ウ7分）

ニギシ2　天邇岐志国邇岐志（上五八オ5）自邇至志以音（上五八オ5分）

シキ2　志幾（中五オ1）（下三〇オ2）

2、一例のみのもの

イ、斯

岐芸斯（雉子）（上三九オ1）斯流（汗）（上四一オ6）斯米許呂母（染衣）（上四一オ6）奴斯（主）（上四二オ4）訓柴云布斯（上五五オ1分）佐久久斯侶（上五九ウ7）知杼理麻斯登登（中一一ウ7）佐泥佐斯（中五一オ4）登斯（年）（中五三オ4）爾斯（西）（下四ウ4）斯怒波米（偲）（下二四オ4）斯麻理母登本斯（下四三オ3）加斯古美（畏）（下三五オ4）遠津山岬多良斯神（上四四ウ5）美波迦斯毘売（中四四オ1）

ロ、志

宇志波祁流（上五四オ6）志多陀美（中九オ3）志那陀由布（中七一オ1）志波邇波（中七一オ7）和志勢（下二〇オ3）斯理奴倍志（下二二オ1）志多多爾母（下二二オ3）加志古志（下三八ウ2）毛毛志紀能（シキは「敷き」とは、紀のかなづかいがちがうので、ここにいれた。）（下三九オ4）麻那婆志良（下三九オ6）

訶志古泥神（上二オ3）无邪志国（上二ウ3分）比那良志毘売（上四四オ3）多比理岐志麻流美神（上四四オ4）比古伊那許志別命（中二〇オ3分）（この人名の注に、「自比至志六字云々」の字があるが、こういうのは別に一字として「とりだきぬことにした。以下同）

志賀（中五九オ3）志理都紀斗売（中六七オ7分）登富志郎女（中六八ウ6）志良宜歌（下二〇オ6）志米須（地名）（下四五ウ6）志比陁君（下五〇ウ5分）須賀志呂古郎女（下五四オ5）

3、混用のあるもの

用例のおおいもの、およびわりにはっきりわかるものから検討していく。

イ、回想の助動詞「し」

『仮字遣奥山路』には、

斯と志は多く通用するかなれども又定りて斯をのみ用ひたる処もあれば今は定りあるをのみあぐされども書紀万葉はみだりなれば古事記にのみよりつ

として、まず「回想のし」をあげ、用例をあげたあと、

皆かくのごとし一処も志を用ひたる事なし

とあるが、

宇岐志阿夫良（下三八オ7）

宇恵志波士加美（中八ウ6）

の二例は「回想のし」とみとむべきであろう。その他、この類とみとむべき斯は、

追斯伎斯（上一三ウ4）麻岐斯（上四一ウ5）久岐斯（上四五ウ3）遠岐斯（上五九ウ2）韋泥斯（上七二オ1）泥斯（中一二ウ3）斗比斯（中五一オ6）淤岐斯（中五五ウ4）麻都理許斯（中六六ウ1）阿波志斯（中七一オ4）（中七一ウ3）美斯（中七一ウ4）（中七一ウ4）岐許延斯迦杼母（中七三ウ1）泥斯久（中七三ウ3）迦美斯（中七四オ5）（中七五ウ2）宇知斯（下七オ7）（下九オ1）阿蘇婆志斯（下三五オ3）能煩理斯（下三五オ5）以上二十一例

ロ、これに対して「尊敬のし」は、大体志をもちいる。

多多志（上二ウ4分）（上四八ウ2）伎許志豆（上三三ウ2）岐加志豆（上三八ウ1）古斐岐許志（上四〇オ5）夜須美斯志（中五三オ3）（下三四オ6）（下三五オ3）（下四〇オ3）阿波志斯（中七一オ4）（中七一ウ3）岐許志母知（中七四オ6）伊麻志（下三四ウ1）（下三九オ1）阿蘇婆志斯（下三五オ3）伊余理陀多志（下四〇オ4）以上十六例

例外は、

美祁斯（上四一オ2）（上四〇ウ5）阿理多多斯（上三八ウ2）

蘇理多多斯豆（上六〇ウ4）伊麻斯（下六オ4）

の四語がある。

なお、「やすみしし」（枕詞）の語義は未詳であるが、「斯志」のかきわけがはっきりしており、「志」は過去より尊敬にもちいられるのが普通であるのでここにいれた。「斯」は「知る」と関係があるとおもうが、まだくわしくはかんがえない。

ハ、四段活用とサ変の連用形

四段活用とみとめられるものはつぎのものである。

佐斯麻岐（差し）（上四〇オ3）（上四二ウ7）佐斯祁流（刺し）（中七三オ3）牟斯夫須麻（「蒸し」の意か。しかし連体格である）（上四二ウ2）

サ行四段をつくる接尾辞「す」がついた動詞の連用形

宇那加夫斯（傾し）（上四一ウ6）本岐玖流本斯（中六六オ7）本岐母登本斯（中六六ウ1）斯麻理母登本斯（下四三オ3）賀良斯（中七二ウ5）（中七二ウ6）阿加斯豆杼富礼（下二三オ1）都岐阿麻斯（下三三オ3）

これに対して志をもちいるものは、

登杼呂許志（上二五ウ4）由良迦志而（上一七オ6）鳴云那志（上二ウ6分）淤志豆流夜（下四オ1）（「押す」は四段とかんがえる）

である。鳴を「那志」というのは、傾を「加夫斯」というのとおなじであろう。「かぶす」→「かぶく」、「なす」→「なく」という関係になろう。ただみぎのごとく、斯と志と字がちがうのが問題となるので「那志」の方を例外とした。

サ変は、

伊夜良許遍斯豆（中七三オ5）

美刀阿多波志都（上三七ウ7）

の二例で、これだけではどちらとも決定できない。

ニ、以上の様に「し」と音がかさなったときにも、その区別は保存されているのであるが、ただ「猪」だけは、まったく混乱している。用例数もおなじである。

志斯（下三四オ5）（下三五オ3）
斯志（下三四オ7）（下三五オ4）

ホ、つぎは間投助詞の「し」であるが、斯十六例、志九例である。

許斯与呂志（上四一ウ1）売邇斯阿礼婆（上四二オ7）伊遠斯那世（上四三オ1）岐美何余曾比斯多布斗久阿理祁理（上七一ウ5）許紀志斐恵泥（中七オ5）宇知旦斯夜麻牟（中八オ5）（中九オ1）延袁斯麻加牟（中一一ウ4）波夜祁牟比登斯和賀毛古爾許牟（中七七オ7）等母邇斯都米婆（下四ウ2）意富岐彌斯与斯登岐許佐婆（下九ウ4）佐泥斯佐泥旦婆（下二〇ウ2）（下二〇ウ3）意富袁爾斯那加佐陀売流（下二三オ7）許斯母（下三八ウ2）袁斯紋母（中七三ウ3）

売邇志阿礼婆（上三九オ7）宇知旦志夜麻牟（中八ウ5）（中九オ4）多礼遠志摩加牟（中一一オ7）夜麻登志宇流波斯（中五五オ4）波那美志比斯賀須（志比を「椎」と解する説もある。中七一オ5）和賀許許呂志紋伊夜袁許遍斯旦（中七三オ4）宇倍志許曾（下一二ウ2）阿岐豆志麻登布（下三四ウ5）

なおこの類に属するとされているもので、連体修飾となるものに

波斯祁夜斯和岐幣（中五五ウ1）
阿那邇夜志愛（上三ウ5）（上三ウ6）（上四ウ2）（上四ウ3）阿袁邇余志（下六ウ1）夜本爾余志（下三七ウ4）意布遠余志（下四三オ5）

がある。これらは形容詞シク活用の語幹となんらかの関係がありはしまいか。間投助詞が斯を主とするとおもわれるのに、この種のものに志がおおいので一応別にした。

へ、形容詞は複雑であるから、各活用形にわけて比較してみよう。

シ

語幹（連用形以下の活用形にあらざるものを一括してここにいれた。終止形かともおもわれるものも、連体修飾をなしているものはここにいれた）

登富登富斯故志（上三八オ7）
伊須久波斯久治良（中七オ3）
美都美都斯久米（中八オ4）（中八オ6）（中八ウ3）（中八ウ6）
加具波斯波那多知婆那（中七二ウ7）
美賀本斯久邇（下六ウ3）
波斯豆摩（下七オ1）
美延斯怒（下三四オ4）
多斯爾波草泥受（下三一オ6）
佐加志売（上三八オ7）
久波志売（上三三ウ1）
宇都志日金拆命（上一六ウ1）
宇都志国玉神（上三一ウ3）（上三七オ7）
宇都志意美（下三六オ5）
須賀志売（下九ウ1）
宇麻志阿斯訶備（上一オ6）
宇麻志麻遅命（中九ウ6）
宇流波志美意母布（中七三ウ4）
久志能加美（中六六オ5）
加那志祁久（中七八オ4）
佐賀志美（下一一オ1）
許登那具志（中七五ウ3）
恵具志爾（中七五ウ3）
多志陀志爾（下二〇オ7）
佐味那志爾（中四九オ1）

連用形

多怒斯久母（下四ウ3）
佐賀斯玖母（下一一オ4）

終止形

阿多良斯（上二三ウ1）
須賀須賀斯（上三〇オ1）
都麻設志夫（上九ウ2）

阿夜爾加志古志（下三八ウ2）
遠波那志（上四二ウ1）
都麻毛具麻都志（上九ウ1）

宇流波斯（中五五オ5）（下二〇ウ1）
宇多陀怒斯佐佐（中六六ウ7）
与斯（下九ウ4）
余良斯那（中七三オ1）
余良斯（中八ウ1）

連体形

久夜斯岐（中七三オ5）
由由斯伎（下三二ウ4）

已然形

宇良胡本斯祁牟（下四三オ6）
佐賀斯祁杼（下一一オ4）
波斯祁夜斯（中五五ウ1）

この比較から簡単になにかをいうことはできない。ことにおなじ語（たとえば「ナシ」）が双方にあるなど、すでにかなり混同のおきたあとのすがたをしめしている。

ト、つぎに同一の語を両方の字でかくのを対照して一覧してみよう。

下

斯多爾（上四二ウ2）（上四二ウ3）（上四二ウ4）
斯多備（下二〇オ3）
斯多邇（下六オ3）
斯多那岐（下二〇オ4）（下二二オ2）
斯多賀多久（下三九ウ7）
斯多能（下四〇オ5）

シヅ枝

斯豆延（下三八オ5）

与呂志（上四一ウ1）

宇都志伎青人草（上一三オ1）（中八二ウ5）
登母志岐呂加母（下三三オ6）

志多杼比（下二〇オ3）
志多紀（中七四オ1）
志多用（下四ウ7）

志豆延（中七二ウ5）（下三八オ1）

シヅ

代

宇斯呂伝（中七一オ4）
夜麻斯呂（下六オ7）（下六ウ7）
夜麻斯呂売（下八ウ7）

樫

波昆呂久麻加斯（下三一オ3）
伊都加斯（下三二ウ4）
加斯賀母登（下三二ウ4）
伊斯許理度売命（上二四ウ1）（上五九ウ1）（上六〇オ6）
伊斯多布夜（上三九オ4）（上三九ウ4）
伊斯都都伊（中八オ5）（中八オ7）

石

柴

斯婆加岐（下四二ウ5）

島

斯麻爾波夫良婆（下二二ウ2）
斯麻能佐岐邪波（上四二オ5）
加毛度久斯麻（上七一ウ7）
夜斯麻久爾（上三八オ6）

足

阿斯用由久那（中五六オ7）
阿斯布麻須那（下二二ウ7）

調熟云志賀（上二五オ5）
比志呂乃美夜（下三七ウ1）
夜麻志呂（下五ウ7）（下八オ2）
夜麻志呂売（下七オ7）
加志能布（中七四オ4）
久麻加志賀波（中五五オ7）
加志波良（下三二ウ5）
意斐志（中九オ2）

Ofôisi が ofisi になって乙類ヒができたとすると「志」がつかわれているのもそれにつれて「斯」が「志」になったものと解することができる。

志婆加岐（下四三オ2）（下四三オ3）（下四三オ4）
志麻都登理（中九オ7）
美志麻（中七〇ウ7）
伊知遅志麻（中七〇ウ7）
阿波志摩（下四オ2）
志麻（下四オ3）
淤能碁呂志摩（下四オ3）
佐気都志摩（下四オ4）
阿岐豆志麻登布（下三四ウ5）
阿志比紀能（下二〇オ1）（足でなく、碁とする説によるも志は混用でもある。あるいは足でもないかもしれない。）

塩　斯本勢能（下四二ウ6）
死　奴須美斯勢牟登（中二九オ6）
人名　美知能宇斯王（中二三オ1）（中二四オ3）（中三二オ2）（中四一オ7）
　　美智能宇斯王（中三七ウ6）
人名　岐多斯比売（下五一オ7）
人名　志本爾夜岐（下一三オ7）
　　那志勢多麻比曾（上三九ウ3）
　　美知能宇志王（中二三ウ6）
　　岐多志比売（下五一ウ6）
　　意富芸多志比売（下五三ウ7）
　　志毘（下四二オ3）（下四二オ6）（下四二ウ3）（下四二ウ7）（下四三オ1）（下四三オ6）（下四三ウ2）（下四三ウ2）（下四三ウ4）
　　志毘都久（下四三オ6）
　　不平幽良志（中四オ2）
　　許麻志母能（下一四ウ4）
人名　斯毘都久（下四三オ5）
ましし　古牟良斯（下一二ウ7）
　　加美豆久良斯（下三九ウ1）
　　淤岐米久良斯母（下四五オ4）
まし　岐奴岐勢麻斯袁（中五四ウ6）
　　多知波気麻斯袁（中五四ウ5）
　　韋泥豆麻斯母能（下三二ウ7）

とする解釈がゆるされること。

3、なんらかの他の基準（たとえば動詞活用の連用形）によって正誤を判定してみたばあい、前項による正誤の判定と一致すること。

などがみられ、これによって、斯と志とがちがう音韻としてもちいられたとかんがえてよいとおもうが、さらに、

4、既述のごとく『古事記』の用字法において、固有名詞とか、漢字原音における同音字（「速」と「袁」、「勢」と「世」など）をのぞいて、一音一字の原則をとっていること。

5、誤用としたものが音韻現象として説明されること。

によって、この説は完全になることとおもう。

そこで、つぎは、この二音の漢字原音における差異をかんがえてみる。永田氏は、これを特殊かなづかいのひとつと解して、

甲　斯紫
乙　志芝師色　（濁音）　士自は不明

とされた。いまこれらの字および「新」の字の『韻鏡』における位置をみれば、

斯　心母　支韻四等　　志　照母　志韻三等
紫　精母　紙韻四等　　芝　照母　之韻三等
新　心母　真韻四等　　師　山母　脂韻二等
　　　　　　　　　色　山母　職韻二等
自　従母　至韻四等　　士　牀母　止韻二等

（声母の名称は一応古来のものにしたがい、細正歯音二等は王力氏などにより「山母」とした。）

となる。この上段と下段との音の共通した相異点は、頭音の相異とは解せないのである。なぜならば、

精母 ts　　照母 t'ś
心母 S　　山母 Ś
従母 dz　　牀母 dź

となって、照母は精母の三等、山母は心母の二等、牀母は従母の二等となっており、韻（介母をふくむ）の相異によって生じた頭音の相異にすぎないとみとめられるからである。そこでこれを韻の相異によるものとすると、当然いわゆる重紐の問題となってくるのである。キ・ヒ・ミの甲類乙類の対立は、四等対三等の対立であることはすでにあきらかなことであるから、みぎの上段四等対下段二三等の対立も同様に解してよいかのことくである。しかし歯音における重紐の問題は、唇音・牙音・喉音におけるよりも複雑であり、この問題に先鞭をつけた有坂秀世博士の「カールグレン氏の拗音説を評す」（『国語音韻史の研究』所収）では、唇音・牙音における三・四等の対立は、歯音においては二等対三・四等となっているとかんがえている。

之を要するに、歯音に於ては、α型韻の拗音的要素は、二等i三四等iであつたと思はれる。（旧版ペ三四三）

だから、上段の四等字に対して、下段の二等字が対することは妥当であるが、下段の三等字「志」「芝」が四等字に対することは問題がある。この問題について完全な説明をくだすことはいまのわたくしにはできないが、Prof. B. Karlgren "Grammata Serica"（The Museum of Far Eastern Antiquities, Bulletin No.12, Stockholm 1940, 谷三十四氏訳、中日漢字形声論字彙引得 1952.）および董同龢氏『上古音韻表稿』（集刊十八）によれば、つぎのごとき音価推定がある。

	K氏	董氏
斯	*sjĕg-sie-si	sieg(-iĕ)
紫	*tsiăr-tsie-tsi	tsieg(-iĕ)
新	*siĕn-siĕn-sin	sien(-ien)
自	*ʔ-dz'i-tsi	dz'ied(-i)

	K氏	董氏
志	*tiəg-tśi-chi	tieg(-i)
芝	*tiəg-tśi-chi	tieg(-i)
師	*şjer-ṣi-shi	sed(-i)
色	*şjək-şiək-sè	sek(-iek)
士	*dz'iəg-dẓ'i-shi	dz'eg(-i)

これによれば上段の字はいずれも介母と中心母音に〔-je-〕をもち、後世〔-iĕ〕と変じた音で、前舌的であったのに対し、下段の字は、中心母音に〔-e-〕〔-ə-〕という、まえよりも中舌的な母音をもっている。

この中心母音の差が甲類乙類シの差とかんがえてよかろう。これがあまりに曖昧であるとしても、董同龢氏の歯音三等対四等の差別についてのかんがえが、たとえば、之韻（表1・1、ペ一二四・一二五）についてよくあらわれているごとく、二等と四等とは韻の相異であるが、三等と四等とは、声母の相異となっているつまり、三等は舌面前音ʧ'ʤ'ɕ、四等は舌尖前音ts'dz'S Z）からというので、ただちに声母の相異であるということにはならないであろう。やはりそれとも関係のある韻の相異としてかんがえるべきものであろうとおもう。まず大体以上の様に、上段の字は前舌的で甲類、下段の字は中舌的で乙類としてさしつかえなかろう。（この点河野六郎氏の御教示をもえた。）

なお、サ行四段活用の連用形に、斯があらわれているのは、ここが甲類相当の位置であるから、斯を甲類ときめたことはまず確実といってよい。

斯志以外の字の用例はかぎられているが、一応しらべておけ

ば、紫（甲類）は、「筑紫」、新（甲類）は「新羅」のみである。芝（乙類）は「芝賀」（下六オ4）の一例のみでこれはのちに論ずる。色（乙類）は、

「色許（男・壳）」（上三一ウ2）（上三二ウ2分）（上三五オ5）（上四五ウ3）（中一九オ7）（中一九オ7分）（中一九オ7）（中一九ウ3）（中一九ウ3）（中二一ウ2）（中二七オ5）（中四〇ウ2）、印色之入日子命（中三二オ3）（中三三オ7）

の二語にあらわれるもののみで、「印色」についてはてがかりはないが、「色許」は「志許」の例とよく一致する。師（乙類）の用例はつぎのごとくである。

しき（地名人名）13　兄師木（中九オ4）弟師木（中九オ4）師木津日子（中一四ウ6）（中一五オ1）（中一五オ5）（中一五オ7）師木県主（中一四ウ6）（中一六オ1）師木水垣宮（中二五オ3）師木玉垣宮（中三一ウ5）師木登美豊朝倉曙立王（中三九ウ6）弟百師木伊呂弁（中八三ウ1）師木嶋（下五〇ウ7）（その他）時置師神（上一四ウ1）万幡豊秋津師比売命（上五八ウ1）壱師君（中一七オ2分）昧師内宿禰（中二〇オ6）市師池（中三八オ4）士師部（中四三オ1）

難波吉師部（中六四オ6）阿知吉師（中七四ウ5）（中七四ウ6分）和邇吉師（中七五オ1）（中七五オ3分）

時置師神は宣長は、「トキオカシノカミ」とよんでおり、そうとすれば、尊敬の助動詞連用形となり、志と一致する。万幡豊秋津師比売命、味師内宿禰の二例は、いわゆる間投助詞の連体法およびク活用形容詞終止形にあたるもので、問題がある。師木（siKi）は志幾（siKi）とあるものと一致する。壱師・市師については不明。士師は、士が乙類であるとすれば、ぐあいはよい。吉師は朝鮮語である。

濁音には甲乙の区別はなくなったとした方がよいであろう。ただ固有名詞において、「伊自牟国造」（上二二ウ3分）「志自牟」（中二九オ4）（中四一オ2）（中四三ウ6）というふるい用字がのこったものであろう。ちなみに「士」の全用例をあげておこう。

八嶋士奴美神（上三〇ウ3）（上三〇ウ5）（上四四ウ6）天之波士弓（上五〇ウ5）（上六一オ1）宇岐士摩理（上六〇ウ4）高千穂之久士布流多気（上六〇ウ6）佐士布都（中四オ5分）波士加美（中八ウ7）高佐士野（中一一オ3）佐士（中一一オ3分）多加佐士怒（中一一オ6）那加士（上四一ウ4）和須礼士（上七二オ1）（中九オ1）登岐士玖能（中四二オ4）（中四二ウ3）（中四二ウ4）阿佐士怒波良（中五六オ6）泥士漏能（下七ウ1）（これは根白の意であるから、白が斯をもちいていたことよりすれば甲類にあたるばあいで誤用である）麻多士（下二三オ4）夜布士麻理（下四三オ2）

四

これでシの全用例を検討してきたのであるが、これから誤用例の検討をはじめいろいろの問題をひきだすにあたって、甲イをi乙イをïとして、ローマ字がき（勿論、音韻をあらわす）にしてその様相をながめてみよう。語根と接辞、および附属の部分（便宜、活用語尾もふくむ）とにわけ、附属の部分を（）にいれた。そして接頭辞・接尾辞と語根とのあいだおよび語根間には－をいれ

た。なにを語幹とし、なにを接辞とするかには問題があるが、なるべくこまかくわけることにした。

1、混用のないもの（二例以上）（○印はsi, sïをふくむ語根とみとめられるもの。）

甲（si）

斯

○sir(i,a)	知，領	15
○sik(i,e)	重，及，敷	6
○siro	白	5
○siri	後	3
○simo	下	2
○asi	葦	2
○fasi	梯	4
○fisi	菱	2
○kösi	腰	2
○sasibu	木名	2
○tasimi(dakë)	地名	2
○ukasi	人名	8
○usi	神名	2

紫

tukusi	筑紫地名	14

新

siragi	新羅	6

甲（zi）

自

i-zimu	人名	1
sï-zimu	人名	1

乙（sï）

志

○sïkö	醜	4
○sïke(köki)		
○sïgi	鴟	2
○sïya	かけごえ	4
○-sïm(ë)	使役助動詞	2
○sïdu	歌名	4
○sïbumi	人名	2
○sïkï	地名	2
○sïgi	地名	2
○sïna-tu	人名	2
sï-zïmu	人名	3
○adi-sïkï	神名	4
○kawe-sïde	人名	3
○kasï-fi	地名	2
○kosï	地名	10
idu-sï	人名	7
itö-sï	人名	4
nigi-sï	地名	2
tagi-sï	人名	7
tagi-sï	地名	2

色

○sïkö	醜	12
○ini-sïkï	人名	2

師

iti-si	人名，地名	2
kisï	朝鮮語	5
○sïkï	地名	13

乙（zï）

士

fazï(yumi)	弓名	2
sazï	野名	4
yasïma-zïnumi	神名	3
-zï	否定助動詞	4
töki-zïku	形容詞シク活	3

2、一例のみのもの

甲（si）

斯

sim(ë)	染
siru	汁
sinof(a)	偲
simar(i)	しまり
fusi	柴
kasiko(mi)	畏
sakuku-sïrö	
masi-tötö	
nusi	主
nisi	西
tösi	年
tara-si	神名
faka-si	人名
kigi-si	雉子
sanesasi	枕詞

乙（sï）

志

momo-sïkï	百磯城
sïtadami	蝮
sïna-dayufu	枕詞
sïfa-ni	下土？
usïfak(eru)	領
wasïse	走
bësï	べし（助動詞）
mana-basïra	柱
sïga	国名
sïri-tukï	人名
sïragë	歌名
sïmësu	地名
sïfida	人名
sugasïröko	人名
kasïko-ne	神名
muzasï	国名
finara-sï	人名
tafiriki-sï	人名
inakösï	人名
töfö-sïra	人名

師

zïsï	人名

乙（zï）

士

uki-zïmari	
kuzïfur(u)	
fazï-kami	
asa-zïno-fara	浅小竹原
yafu-zïmar(i)	八節結り

3、混用のあるもの

ここでは活用語尾および接辞が問題となっているのでこれらを（）にはいれなかった。以下おなじ。

		斯（甲 si）		志（乙 sï）
正用	回想の「し」	siki-si		uki-sï
		maki-si		uwe-sï
		kuki-si		
		woki-si		
		wine-si		
		ne-si		
		tofi-si		
		oki-si		
		kö-si		
		afasï-si	2	
		mi-si	2	
		kiköye-sika		
		kami-si	2	
		uti-si	2	
		asobasï-si		
		nöböri-si		
		ne-siku		
	四段	sasi-maki		
		sasi-keru		
		musi-busuma		
		unakabu-si		na-sï
		fogikurufo-si		
		fogimötöfo-si		
		simarimötöfo-si		
		-gara-si		
		aka-si(te)		tödörökö-sï
		ama-si		yuraka-sï
	サ変	(iyawoköni)si(te)		(mitoatafa)sï(tu)

誤用

4、混用あるもの……形容詞、

	斯 (甲 si)	志 (乙 sï)	
語幹	tōfōtōfō-si(kosï)	saka-sï(me)	
	isukufa-si(kuzira)	kufa-sï(me)	
	mitumitu-si(kumë) 4	utu-sï(fikane)	
	kagufa-si(fanatatibana)	utu-sï(kunitama)	
	migafo-si(kuni)	utu-sï(ōmi)	
	fa-si(duma)	suga-sï(me)	
	(mi)ye-si(no)	uma-sï(asikabï)	
	ta-si(nifa)	uma-sï(madi)	
		ku-sï(no)	師 (sï)
		kana-sï(keku)	uma-sï(utinosukune)
		urufa-sï(mi)	
		saga-sï(mi)	
		nagu-sï	
		wegu-sï(ni)	
		tasï-dasï(ni)	
		samïna-sï(ni)	
連用	tano-siku(mö)		
	saga-siku(mö)		
終止形	atara-si		
	sugasuga-si	kasïko-sï	
	na-si	na-sï	
	urufa-si	namitaguma-sï(mö)	
	utadano-si		
	yō-si		
	yōra-si(na)		
	yōra-si	yōrō-s	
連体	kuya-siki	utu-sïki	
	yuyu-siki	tömö-sïki	
しけ	urakofo-sike(mu)		
	saga-sike(do)		
	fa-sike(yasi)		

?	間投助詞	kō-si-yōrōsï		tarewo-sï-makamu	
		meni-si-areba		meni-sï-areba	
		iwo-si-nase		yamatö-sï-urufasi	
		yösöfi-si-tafutoku		fanami-sï-fisinasu	
		utite-si-yamamu	2	utite-sï-yamamu	2
		yewo-si-makamu		wagakökörö-sï-zö	
		fayakemufitö-si-waga		ube-sï-kösö	
		tömöni-si-tumeba		akizu-sï-matöfu	
		öfökimi-si-yösitö		kökï-sï-fiwene	
		sane-si-saneteba			
		öföwoni-si-na			
		kö-si-mö			
		wo-si-zömö			
	連体	fasikeya-si-wa		ananiya-sï-e	4
				awoniyö-sï-	
				yafoniyö-sï-	
				öfuwoyö-sï-	
誤用	尊敬	aritata-si		tata-sï	2
		soritata-si		kikö-sï	
				kika-sï	
				kofïkikö-sï	
				yasumisi-sï	4
				afa-sï-si	2
				kikö-sï-möti	
		ima-si		ima-sï	2
		mike-si	2	asoba-sï-si	
				iyöridata-sï	
				師 (zsi)	
				tökiöka-sï	

? 師 (乙 sï) töyöakitu-

正用

5、混用のあるもの……その他

		斯（甲 si）		志（乙 sï）	
斯の優勢なもの	下自石足人名	◦sita	9	sïta	3
		◦si(ga)	4	sï(ga)〔芝〕	1
		◦isi	7	öfïsï	1
		◦asi	2	asïfikïno	1
		◦(mitino)usi	5	(mitino)usï	1
	しらま	◦-rasi	3	-rasï	1
		◦-masi	3	-masï	2
同数	猪代樔塩死倡	sisï	2	sïsi	2
		sirö	4	sïrö	4
		kasi	3	kasï	3
		sifo	1	sïfo	1
		sise(mu)	1	sïse	1
		kitasi	2	öfö-gitasï	2
志の優勢なもの	垂枝	sidu(ye)	1	◦sïdu(ye) 2 / sïd(u) 1	3
	柴	siba	1	◦sïba	3
	島	sima	4	◦sïma	8
	人名，神名	sibi	1	◦sïbi	10

ne-zïro（根白）は　白が siro であるから誤用

さて、みぎの五表からいろいろなことがかんがえられるが、おもだったものを列挙してみよう。なお、これらの考察には、キ・ヒ・ミと一緒にかんがえなければならない点がおおい。

1、まずsi sïが他の音節と語根を構成する際に、どの様な法則性がみられるか。有坂博士の「古代日本語に於ける音節結合の法則」（『国語音韻史の研究』旧版ペ一一三―四）によれば、甲類 i は中性母音であり、乙類 ï は母音交替によっておきた末尾の母音の変質のために、他の音から分化したものがおおかろう、ということであるが、その点を吟味してみたい。みぎの表中から、シのはいっている語根の音節結合の様子をながめてみよう。資料は、1の混用のないものと、5の大体確実なものをもちいる。資料にもちいた語には。がつけてある。濁音は省略する。

同一語根中の他の母音語数（のべ数）	si	sï
a	(35) 9	(18) 5
i	(14) 4	(16) 4
ï	0	(21) 1
u	(17) 4	(10) 4
e	0	(3) 2
ë	0	(10) 1
o	(7) 2	(16) 1
ö	(1) 1	(1) 1
単独	(35) 3	

この表についてみればわかるごとく、si sïとも、a i u の母音と結合することはおおいが、o öと結合することはあまりない。キ・ヒ・ミのばあいをみると、（まだ正確な集計を発表しえないので、大体の傾向でいうのであるが）a i u は同様であるが、o は比較的おおいけれども、öと結合することは非常にすくない。ことにïのつくのは、kökï（幾許）、-nömï（のみ）ぐらいのものであろう。つまり、a i u oとは結合しやすいが、öとは非常に結合しにくい、ということになろう。シ甲では、kösi（腰）、シ乙では sïkö（醜）の各一語のみである。

ところが、泉井久之助博士は、「上代日本語における母音組織と母音交替」（『五十周年記念論集』京都大学文学部 昭和三十一年）なる論文において、öはö以外ではiと結合することがもっともおおいとして、二十四語の例をあげていられるが、そのなかで、シについて前述の結果よりみれば、シこ（醜）とあるのは乙類のシであり、ナハ＝シろ（代）は不明、シとと（巫島）は合成語かもわからないし、シ以外の語についても、語構成上、いかがとおもうもの（イヤチこ、イキどホ＝ル、こシキ）や、わたくしは除外すべきだとかんがえる動詞活用語尾とおもわれるもの（ヒこ＝ヅル、キこ＝ス、キこ＝ユ）もはいっている。その他に、甲乙のかきわけのないものもあるが、これらも『古事記』以前ほどとおからぬ時期にはいいわけがあったとしなければならないのに、それをすべてi音としておおまかにかんがえている、つまりそのなかにはïにいれるべきものがなおありうるのである。（泉井博士のあげていられる例中、確実なものは、fitö, fitö-tu, midöri, töki, yöfi のみである）いまざっと『仮字遣奥山路』でしらべたところによればイ段甲乙と、o öとの関係はつぎのごときものとなる。

	ki	gi	si	fi	bi	mi	計		kï	gï	sï	fï	bï	mï	計
ö	2	0	1	3	0	1	7		0	0	1	0	0	1	2
o	3	3	2	10	0	9	27		1	0	1	1	0	1	4

これによって、i とöとのむすびつきということは、決しておおいものではないことがわかるが、さらに泉井博士の説のごとくïはo uとむすびつくA領域のものであるというのも、確証はなはだとぼしくおもう。

つぎに有坂博士の説のごとく、i とöとのむすびつきは、はたしてiを中性母音とするほど優勢なものであろうか。もし中性であるならば、有坂博士が、ア列やウ列はオ列乙と結合することがすくないと結論されたパーセントよりも、イ列がオ列乙と結合するパーセントの方がいくらかでもおおくなければならないのにキ・シ・ヒ・ミの四音甲についての集計はかえってすくなくなる。

	o	ö	o/ö
ア列	41	19	2.16
ウ列	14	7	2.00
イ列	27	7	3.86

すなわち、iは、a uよりも、o とむすびつきやすく、öとむすびつきにくいということになる。（ア列・ウ列は有坂博士「古代日本語に於ける音節結合の法則」（『国語音韻史の研究』ペ一〇九による）有坂博士が、ア列・ウ列・オ列甲については統計をだしながら、イ列については統計をだされなかったのは疑問であるし、またいわゆる母音調和をもつ諸外国語との比較からいうと、この様な統計の結果はまずいかもわからないが、調査の結果だけは報告しておきたい。なお、泉井博士の論文は規模の雄大なことと、視野のひろいことでまことに敬服すべくおしえられるところおおいが、まだ愚鈍な一国語学徒を納得させるまでにいたらない。

つぎに、ïは、連続して語根を形成する例は皆無であると（大野晋氏「万葉時代の音韻」（『万葉集大成』6 ペ三一三）いわれているが、シの甲乙がはっきりしてみると、sïki（地名、神名、人名）という語は二十一例ともまったくあやまりなくもちいられているし、あるいは、『古事記』にはないが、岸のキシ（木之・木志・城師・木笑・貴志）はkïsïかもわからない。しかし、たしかにïeëという母音同士で音節をつくることのすくないことはいいうることである。

2、シのつぎに濁音のくるばあいに、sïであることが絶対的におおい。

si　sasibu fa-si(duma)

sïgi, sïdu, sïbumi, sïde, sïd(u), sïga, sïdu(ye).

sïba, sïbi.

これは、キ・ヒ・ミにおいてははっきりいえないので、やや躊躇

されるが、もしïと濁音との間に関係があるとすれば、ïのあとだから濁音になったのではなくて、濁音があったのでïとなったのではあるまいか。「白が」の意の「斯賀」を、一例だけ「芝賀」としているのは、そういう類推によったものか、あるいはïという音の音声的な傾向であったのかもしれない。勿論この反対（すなわち、5の「志の優勢なもの」参照）もある。

3、sïの音声的性質として、siとあるべきものが、まえからの乙類音öがつづくと、sïに変ずることがあるらしい。これはöの中舌性にひかれたものとおもわれる。

öfö-isi〉öfisï tödörökö-si〉tödörökö-sï

yö-si yöra-si に対し **yörö-sï** も同様に解してよかろう。また **tömö-siki** も同様か。この反対のばあいにみえる **töfötöfö-si (kosï)** のsiは、後述のごとく、この方が本来のかたちなのであろうから、öに影響されなかった例と解したい。これは従来日本語の母音調和は接辞にまでおよばないとされていた説に対し、あるいはその反証となるかもしれない。勿論これは接辞全般にわたってあらわれる現象ではないが、有坂博士も泉井博士も若干の例をしめされており、存在していたことは確実なのであるから無視してしまってよいものではない。

4、siの一音節語（**sir sik si**）は混用がおきないのは、その混用がただちに語義の混同をきたすからであろう。

5、回想の「し」が混用例のすくないのは、この助動詞がすぐまえの連用形のi音と同音のばあいがおおいためでもあろう。

なお、この回想の「し」について、大野晋氏が、ク語法はすべて活用語の連体形にアクのついたものとして説明できるが、ただこれだけが例外であるのは、「シの母音の性質が、たぶん、イ列甲類の母音iとは異なって、ïという乙類の母音であったからだろうと思われる。ïという母音の下にはaはつづかないのである」（『日本古典文学大系 万葉集』一〈ページ六〇〉）とのべていられるが、如上、甲と乙とにわけてみると、回想の「し」は甲類に属するのであるから、この説はうべないがたい。泥斯久（寝しく）は甲類である。

6、サ変動詞連用形の「し」は甲・乙類どちらとも決定できないが、カ変の連用形「き」が甲類であることとあわせかんがえると、甲類かもしれない。

7、「あそばしし」「あはしし」「やすみしし」のかきわけがはっきりしているのに、「猪」「鹿」の「しし」がまったく混同しているのは、この二音を意味的に区別しなければならない必要がなかったからであろう。

8、間投助詞「し」の混用については明確な理由がみつからぬが、この語は語義や用法においてはっきりしていて、特に注意して発音しなくても語義の混同をおこさなかったからではなかろうか。そして、この語は本来甲と乙のどちらであったかきめかねるが、もし、前項3の観点からみれば、**yamatö-sï-urufasi waga kökörö-si-zö, kökï-sï-fiwene** などはöにひかれてïになったものとして説明できる。そこで大体甲類であったとしてよいのではなかろうか。そうしてみると、この一類のもので、連体修飾をしているもの、**awoniyö-si-, yafoniyö-si-** なども、同様に、もと甲類であったものが乙類になったのではなかろうか。

9、尊敬の助動詞「す」の連用形「し」は乙類であるから問題がある。つまりこの語は、サ行四段に活用するとされているが、サ行四段ならばその連用形は甲類がくるべきところである。連用形に乙類がくるのは二段活用である。前項でのべたごとく、師は乙類相当の字であるが、「時置師神」を宣長のごとく、「トキオカシノカミ」とよむとすればこの「師」はやはり尊敬の助動詞となり、ますますその連用形が乙類であることは確実となる。そこで佐伯梅友博士が尊敬の助動詞「す」の起源を使役の助動詞に擬された説がかえりみられてくる。（『奈良時代の国語』〈ページ一五七〉）しかし、下二段の「せ せす」活用では活用があわないから、「しし す」という活用があったのではないか。そして、使役の助動詞といわれている「しむ」-sïm(ë)は、おそらくその「し」に、造動詞語尾「む」（下二段）がついて、「させる様にする」という意をあらわす様になったのではないかとおもうが、勿論暗推の域をでない。

10、形容詞シク活用の語幹のシは乙類ではなかったかとおもわれそうであるが、さきの7と同様にもかんがえられる。連用形シク、連体形シキ、已然形シケのシがいずれも甲類であり、また終止形は、シク活用もク活用もシの一音になっている。つまり、シク活用の語幹がsïで、終止形のシがsiならば、シシ（sïsi）とかさなるはずである。ところがシの一音になっているところをみると、シク活用の語幹も甲類のsiではなかったか。（これは東京教育大学学生藤本二朗君の説をいれた。）そこで、乙になっている例をみると、連体形には乙類öによる影響の例がみられるが、もうひとつ私見として、uの影響という点をあげてみたい。uは普通奥舌母音といわれているが、日本語のウは、現代東京語にあらわれる〔ɯ〕ほどでなくても、音声学でいう円唇奥舌狭母音という様なものではなく、ずっとまえよりであったろうとおもう。（服部四郎博士『音声学』〈ページ一六一〉）この点について、ウを、「音声学的に、…最狭かつ最後舌的なu」「すぐれて後母音的」と規定する泉井博士の説（前出、同書〈ページ一〇九〉）とまったくあい反するが、わたくしがウを〔ɯ〕にちかいと規定するのはつぎの理由による。上代母音音節ア・オ・エは音結合体のなかにはもちいられなかったのに、イ・ウにはもちいられたものがある。「カイ（櫂）」「クイ（悔）」「オイ（老）」「コイ（臥）」や、「マウケ（儲）」「マウス（申）」「ウウ（植）」などの例があげられる。（橋本進吉博士「国語の音節構造と母音の特性」〈『国語音韻の研究』〉ページ二〇九）また、これらが、ヤ行のイや、ワ行のウであってア行のものではないということは、おそらく確実とおもわれるが、かえってそのことが、つまり、ヤ行のyiがiとなり、ワ行のwuがuとなっていたということが、ウ音の後母音性を否定することになる。もしウが後母音であるならばwuという音はwo、waと同様に存在していてもよいはずであるのに、それがア行音と一緒になってしまっている。これは、イとウとがともにまえよりのくちのひらきのせまい母音であったからであるとおもう。また、上代東国方言に、「ハリ（針）」を「ハル」、「シリ（知）」を「シル」、「ユリ（従）」を「ユル」、「ツキ（月）」を「ツク」という様な例があり、そのまま現代東北方言にひきつがれて、イとウとの混同がある。これからかんがえると七・八世紀における大和地方のウの音も、現代関西地方におけるウやあるいは東京地方におけるウとあいにた様なウであったろうということは想像にかたくない。つまりウは、張唇中舌狭母音〔i〕にちかい音であったろうとおもう。（この問題はさらに、拗音およびイ・ウ音便と関係をもつとおもうがここではこのくらいにとどめる。）

そこでuの優勢な音節結合単位のあとのiは、ōのばあいとおなじ様にïとなることがあったのではなかろうか。uru-si, 四例全部ïになっているのをはじめとして、urufa-si, ku-si, nagu-si, wegu-si, kufa-si, suga-si などはその例と解せそうである。しかし、勿論そうでないものもいろいろあるがひとつの傾向として指摘できる。

yörö-si, yöra-si については、すでにふれたが、この語の語幹はyörö であったのであろう。(yö と関係は勿論あるが、)これに形容詞接尾辞siがついたとき、当然 yörö-si となるべきであった。ところが、siがつよく意識されたときには、1にのべたごとく、öとあいいれず、yöra-si のかたちをとり、yörö がつよく意識されたときにはsiを中舌化して、yörö-si となったのであろうとおもう。すなわち、

yörö-si → yöra-si
yörö-si

となったとかんがえたいのである。

11、さて、単語の一々についてはまだのべるべきことはおおいが、すべて省略して、最後に、甲乙両類のシの混同がはじまってどちらになろうとしていたのかということをかんがえておこう。これは誤用例の音声学的説明である。音韻の区別の意識は語頭においてもっともはっきりしている。このことは、ハ行音が、語頭においてながくfを維持していたが、語中においてははやくよりwに変化したこと、また、オ・ヲ、イ・キ、エ・ヱの区別というのも、語頭において区別のあるあいだは区別があったとすべきである、ということなどをかんがえればわかる。そこでいま、確実な例（前述。をつけたもの）から、語頭に「し」をもつものをぬきだして、その誤用例の比率をみるとつぎのごとくになる。

語頭音	I 全語数(正用使用回数)	II 誤用語数(使用回数)	II／I %
sï	11 (70)	4 (7)	0.36 (0.1) 志とあるべきを斯とあやまったもの
si	7 (44)	2 (4)	0.28 (0.11) 斯とあるべきを志とあやまったもの

これよりかんがえると、まだ誤用はそれほどはなはだしくはなく、ともかく音韻としては区別されており、まだ顕著に一方が他方に合併されていくという様な形跡はみられない。混用の現状をみると、siba→siba, sima→sima, sibi→sibi という様な、乙を甲にあやまるものでは、つぎの子音が唇音など調音点のまえのものにおいて混用があり、sita→sita, si(ga)→si(ga) の様に、甲を乙にあやまるものにおいては、つぎの子音の調音点がなかほどかうしろの方にあるということがみられる。これは前舌と中舌との対立がゆるんだときにおきた現象としてまことに象徴的であり、おそらく音韻としてはどちらか一方に統一されたという様なものではなく、混然としたものとなったのではあるまいか。また、語中語尾のシには、前述のごとくかなりのみだれがあるが、それが辞のばあいには、語幹の音に同化した変化がかなりあるのではないかとおもわれ、その際にもどちらに統一されるという様なことはなく混同していったものとおもう。それと反対に、sikö siki に用例数がおおいにもかかわらず混用のないのは、siku(重く、及く、敷く)との語義の混同をおこすということのほかに、

Kの調音点が、もっとも後方にあったという音声的な理由によるものと説明されよう。さて、上代語のシの音価について、音声学的な理由から[si]か[ɕi]であったろうとする意見が亀井孝氏によってだされている（「上代日本語の音節『シ』『チ』の母音」『言語研究』第十六号 昭和二十五年八月）が、上来の考察によって、泉井久之助氏が、「上代日本語における母音組織と母音交替」で

ïのiおよびuに対する結合関係に語例より見て不安定なものがあったのは、ïの顕現が当時すでにiと合一して、新しく/i/を構成する過程にあったからであろう。この/ï/は従来の/i/を時に/ï/とし、大部分の/ï/をすでに/i/に化していたと思われる。

としている方に賛成したい。そこでiとïとの混同の結果はIとなったものとおもうのである。

五

つぎに、オの問題にうつる。『古事記』においては、オにも、「淤」と「意」の二字が次表の様にもちいられている。他に上巻に、「於」と「隠」が一例ずつある。

	上	中	下	計
淤（一部にもちいる）	21	11	33	65
意（同）	6	40	35	81

以下まえとおなじてつづきによって調査してみる。

1、混用のないもの

イ、淤

オフ（生）7　淤斐陀互流（下六オ2）（下六オ3）（下三八ウ6）（下三七ウ6）多斯美陀気淤斐（下三一オ5）伊久美陀気淤斐（下三一オ5）伊久美陀気淤斐（下三一オ4）

オツ（落）5　淤知受（上四二オ6）淤知爾岐登（下二一ウ1）淤知布良婆（下三八オ3）（下三八オ5）淤知那豆佐比（下三八オ7）

人名4　大帯日子淤斯呂和気命（中三二オ3）（中三三オ5）大帯日子淤斯呂和気天皇（中四三オ2）（中四七ウ4）

オフ（覆）3　阿米袁淤幣理（下三七ウ7）比那袁淤幣理（下三八オ2）阿豆麻袁淤幣理（下三八オ1）

神名3　淤加美（上四四オ3）（上三一オ1）（上一〇オ2）

オフ（負）2　伊多弖淤波受波（中六五オ3）那爾淤波牟登（下三四ウ3）

ロ、意

意祁都命（中二一ウ4）意祁都比売命（中二一ウ5）

2、一例のみのもの

イ、淤

淤伊爾祁流加母（老）（下三二ウ7）淤曾夫良比（押）（上三八ウ5）淤登多那婆多能（弟）（上五三オ2）淤志弖流夜（押）（下四オ1）淤呂須波多（織る）（下一〇オ6）以下固有名詞淤母陀流神（上二オ2）淤縢山（上一〇オ7）淤美豆奴神（上三一オ4）淤煩鉤（上六八ウ6）

ロ、意

比古意須王（中二三オ5）

3、混用するもの

「大」「多」の意の「おほ」はほとんど「意富」でかかれているとみとめられるが若干の違例がある。

固有名詞はほとんど「意富」とかく。

意富祁王（命・天皇）（人名）9（下二八ウ6）（下四三オ7）（下四三ウ5）（下四六オ1）（下四六オ4）（下四七オ2）（下四七オ5）（下四八ウ3）（下五〇オ7）

意富多多泥古（人名）5（中二六ウ2）（中二六ウ4）（中二七オ2）（中二七オ3）（中二七ウ4）

意富美（人名）5（中六八オ1）（中七〇オ4）（下二五ウ7）（下二七オ7）（下二九ウ1）

意富富杼王（人名）3（中八三ウ3）（中八三ウ6）意富本杼王（下一八オ6）

意富韋古（所名）2（下七オ4）（下七オ3）

意富佐邪岐（人名）2（中七三ウ6）（中七三ウ6）

一例のみの固有名詞はつぎのごときもの

意富斗能地神（上二オ1）意富加牟豆美命（上一三オ2）意富那毘（中二〇オ4）意富阿麻比売（中二五オ7）意富美和之大神前（中二七オ4）意富多牟和気（中五七ウ2）意富芸多志比売（下五三ウ7）意佐加（中八オ2）

固有名詞以外のもので、「大」の意のもの。

意富麻磐（大前）（下二一オ2）（下三四オ5）意富夜麻登（大倭）（中一五ウ3）（中一八オ2）意富袁爾波（下二三オ6）意富速爾斯（下二三オ7）意布袁余志（下四三オ4）意富祁久遠（多けく）（中七オ6）意富牟盧夜（大室屋）（中八オ2）意悲志（大石）（中九オ2）意富美伎（大御酒）（中七四オ5）意富迦波良（大川原）（中五六ウ2）意富多久美（大匠）（下四二ウ2）

これに対して固有名詞というか普通名詞というか

淤富久邇（大国）（上四二オ3）淤富佐迦（大坂）（下一五オ4）

の二例のみは「淤」の字をもちいる。ところが、かなり混用のおおい「おほ」の例はつぎの様なものである。

意	淤
大君 意富岐美（中五三オ3）（下一〇オ6）（下二二ウ1）（下三五オ3）（下四二ウ3）（下四三オ2）意富岐弭斯（下九ウ3）7	淤富岐美（下四〇オ3）（下六オ5）（下三四オ6）3
大根 意富泥（下九オ1）1	淤富泥（下七オ7）1
大宮 意富美夜（下四二オ7）1	淤富美夜比登（下三九オ4）1

つぎに、「おほ」以外のもの。

意	淤
汝 意礼（上三七オ6）（中六ウ3）（中四七ウ5）（中四七ウ6）意能賀袁（中二九オ6）意能碁呂嶋（上九オ1分）6	淤能碁呂嶋（上二ウ7） 淤能碁呂志摩（下四オ3）2 淤美能袁登売（下三九ウ6） 淤美能古（下四二ウ4）2
臣 都夫良意美（下二五ウ7）（下二七オ1）（下二六ウ5） 宇都志意美（下三六オ5）4	

	淤		意	
混用のないもの	of(u)	6	oke	2
	ot(u)	5		
	osïrŏ	4		
	of(u)	3		
	okami	3		
	of(u)	2		
一例のもの	oyir		osu	1
	osŏbur			
	otŏ			
	os(ï)			
	or(ŏ)			
	omŏ			
	otŏ			
	omidu			
	obo			
おほ	ofo	2	ofo	39
	ofokimi	3	ofokimi	7
	ofone	1	ofone	1
	ofomiya	1	ofomiya	1
その他	ore	6	ore	2
	omi	4	omi	2
	osufi	3	osufi	2
	omŏf	3	omŏf	7
	oki	1	oki	6
	ok	1	ok	3

みぎの資料を整理してみる。

	淤	意	c.f. 隠伎（上一五オ2）
置	意岐米（下四五オ6）1		
沖	意岐都登理（上七一ウ7）		
襲	意須比（中五二ウ2）（中五三オ1）（中五三オ6）3	淤須比（下一〇ウ1）（上三八ウ4）2	
思	意母閇杼（中五二ウ7）意母布（中七三ウ4）意母比豆麻（下二三ウ3）3	淤母比豆麻（下三一オ7）（下二三ウ1）阿比淤母波受阿良牟（下七オ6）淤母比伝（中七八オ5）（中七八オ4）（中七八オ3）（中七八オ2）7	
		淤伎（上一四ウ6分）淤岐嶋（上三二オ7）淤岐都登理（上四〇ウ6）（上四一オ3）（上四一オ7）淤岐幣通（下三ウ2）6	
		淤岐米（下四五オ3）（下四五オ6）淤岐斯（中五五ウ4）3	

ひだりの表でみると、淤は乙類、意は甲類であるかのごとくおもわれる。しかし、五十五例もある「意富」の「富」が決定できなくてはこの問題は解決しない。そこでホのかなの甲乙決定とにらみあわせてかんがえていきたい。

六

ホのかなには、富本番菩薩品の六種がもちいられ、それぞれつぎの様にもちいられている。

	序	上巻	中巻	下巻	計
富（一般にもちいられる）	0	0	14	35	86
本（一般にもちいられる）	0	0	33	35	
番（ホト、ホノニギノミコト、ニホにもちいられる）	1	7	1	0	
菩（ホヒノミコト、ホギにもちいられる）	0	6	1	0	
蕃（ホトにもちいられる）	0	1	0	0	
品（ホムヂ、ホムダ、ホムヤ、ホムツの固有名詞にのみもちいる）	1	0	13	1	
煩（濁音）	0	2	2	6	
					10
					15
					1
					7
					9
					54

「大」「多」の意の「おほ」はほとんど「意富」でかかれているとみとめられるが若干の違例がある。

固有名詞はほとんど「意富」とかく。

意富祁王（命・天皇）（人名）9（下二八ウ6）（下四三オ7）（下四三ウ5）（下四六オ1）（下四六オ4）（下四七オ2）（下四七オ5）（下四八ウ3）（下五〇オ7）

意富多多泥古（人名）5（中二六ウ2）（中二六ウ4）（中二七オ2）（中二七オ3）（中二七ウ4）

意富美（人名）5（中六八オ1）（中七〇オ4）（下二五ウ7）（下二七オ7）（下二九ウ1）

意富富杼王（人名）3（中八三ウ3）（中八三ウ6）意富本杼王（下一八オ6）

意富草古（所名）2（下七オ4）（下七オ3）

意富佐邪岐（人名）2（中七三ウ6）（中七三ウ6）

一例のみの固有名詞はつぎのごときもの

意富斗能地神（上二オ1）意富加牟豆美命（上一三オ2）意富那毘（中二〇オ4）意富阿麻比売（中二五オ7）意富美和之大神前（中二七オ4）意富多牟和気（中五七ウ2）意富芸多志比売（下五三ウ7）意佐加（中八オ2）

固有名詞以外のもので、「大」の意のもの。

意富麻幣（大前）（下二一オ2）（下三四オ5）意富夜麻登（大倭）（中一五ウ3）（中一八オ2）意富袁爾波（下二三オ6）意富遠爾斯（下二三オ7）意布袁余志（下四三オ4）意富祁久遠（多けく）（中七オ6）意富牟盧夜（大室屋）（中八オ2）意悲志（大石）（中九オ2）意富美伎（大御酒）（中七四オ5）意富迦波良（大川原）（中五六ウ2）意富多久美（大匠）（下四二ウ2）

これに対して固有名詞というか普通名詞というか

淤富久遍（大国）（上四二オ3）淤富佐迦（大坂）（下一五オ4）

の二例のみは「淤」の字をもちいる。ところが、かなり混用のおおい「おほ」の例はつぎの様なものである。

意		淤	
大君	意富岐美（中五三オ3）（下一〇オ6）（下二二ウ1）（下三五オ3）（下四二ウ3）（下四三オ2）意富岐彌斯（下九ウ3）7	淤富岐美（下四〇オ3）（下六オ5）（下三四オ6）3	
大根	意富泥（下九オ1）1	淤富泥（下七オ7）1	
大宮	意富美夜（下四二オ7）1	淤富美夜比登（下三九オ4）1	

つぎに、「おほ」以外のもの。

汝	意礼（上三七オ6）（中六ウ3）（中四七ウ5）（中四七ウ6）意能賀袁（中二九オ6）意能葛呂嶋（上九オ1分）6	淤能碁呂嶋（上二ウ7）	
臣	都夫良意美（下二五ウ7）（下二七オ1）（下二六ウ5）宇都志意美（下三六オ5）4	淤能碁呂志麻（下四オ3）2	
		淤美能袁登売（下三九ウ6）淤美能古（下四二ウ4）2	

襲 意須比（中五二ウ2）（中五三オ1）（中五三オ6）3

思 意母閇杼（中五二ウ7）意母布（中七三ウ4）意母比豆麻（下二三ウ3）3

沖 意岐都登理（上七一ウ7）

置 意岐米（下四五オ6）1 c.f. 隠伎（上一五オ2）

みぎの資料を整理してみる。

	淤		意	
混用のないもの	of(u)	6	oke	2
	ot(u)	5		
	osïrō	4		
	of(u)	3		
	okami	3		
	of(u)	2		
一例のもの	oyir		osu	1
	osōbur			
	otō			
	os(ï)			
	or(ō)			
	omō			
	otō			
	omidu			
	obo			

	淤		意	
おほ	ofo	2	ofo	39
	ofokimi	3	ofokimi	7
	ofone	1	ofone	1
	ofomiya	1	ofomiya	1

	淤		意	
その他	ore	6	ore	2
	omi	4	omi	2
	osufi	3	osufi	2
	omōf	3	omöf	7
	oki	1	oki	6
	ok	1	ok	3

淤須比（下一〇ウ1）（上三八ウ4）2

淤母比豆麻（下三一オ7）（下二三ウ1）阿比淤母波受阿良牟（下七オ6）淤母比伝（中七八オ5）（中七八オ4）（中七八オ3）（中七八オ2）7

淤伎（上一四ウ6分）淤岐嶋（上三二オ7）淤岐都登理（上四〇ウ6）（上四一オ3）（上四一オ7）淤岐幣通（下三ウ2）6

淤岐米（下四五オ3）（下四五オ6）淤岐斯（中五五ウ4）3

ひだりの表でみると、淤は乙類、意は甲類であるかのごとくおもわれる。しかし、五十五例もある「意富」の「富」が決定できなくてはこの問題は解決しない。そこでホのかなの甲乙決定とにらみあわせてかんがえていきたい。

六

ホのかなには、富本番菩蕃品の六種がもちいられ、それぞれつぎの様にもちいられている。

	序	上巻	中巻	下巻	計
富（一般にもちいられる）	0	0	14	35	37	86
本（一般にもちいられる）	1	0	0	33	21	54
番（ホト、ホノニギノミコト、ニホにもちいられる）	0	0	6	1	0	9
菩（ホヒノミコト、ホギにもちいられる）	0	1	7	1	0	7
蕃（ホトにもちいられる）	0	1	0	0	0	1
品（ホムヂ、ホムダ、ホムヤ、ホムツの固有名詞にのみもちいる）	1	0	13	1	1	15
煩（濁音）	0	2	2	6	1	10

これもさきと同様に整理する。

1、混用のないもの

イ、富　「おほ」には「ほ」に関するかぎり混用例がないが重複するのではぶく。

人名3　夜知富許能（上三八オ5）（上三九オ6）（上四〇オ5）

ホラ2　富良富良（上三五ウ7）

トホル（通）2　阿加斯豆杼富礼（下二三オ1）余理泥豆登富礼（下二二オ4）

トホ（遠）2　登富登富斯（上三八オ7）

ロ、本

サホ（地名）17　沙本之大闇見戸売（中二二ウ2）沙本毘古（中二二ウ2）（中二二ウ4分）（中二三ウ3）（中三一ウ6）（中三四オ7）（中三四ウ1）（中三五オ5）（中三五ウ4）（中三三オ1）沙本毘売（中二二ウ3）（中二二ウ4分）（中三三オ6）（中三四オ6）（中三五ウ5）沙本穴本部（中三三ウ7分）沙本（中三五オ2）

人名5　伊邪本和気（下一オ4）（下一ウ6）（下二オ4）（下一三ウ6）（下四一ウ4）

ホツエ（上枝）3　本都延（中七二ウ5）（下三七ウ7）（下三八オ2）

ホダリ（秀逸）3　本陀理（下三九ウ6）（下三九ウ7）（下四〇オ1）

シホ（塩）2　志本（下一三オ7）斯本勢（下四二ウ6）

人名2　袁邪本王（中二三ウ4）（中三二ウ3）

ホ（百）2　伊本知母賀母（下三六ウ7）夜本爾余志（下三七ウ4）

結論をいそぐために、この混同のないものを整理すれば、

富	
yati-fokö	3
fora-fora	1
döfor(e)	1
töfor(e)	1
töfotöfo-si	1
本	
safo	17
izafo-wake	5
fo-tu-ye	3
fo-dar(i)	3
sïfo, sifo	2
wozafo	2
fo	2

となり、ö と語根をつくる富が乙類であり、a・o と語根をつくる本が甲類であることは決定してもよいであろう。

2、一例のみのもの

イ、富　曾富理（案山子）（上四六オ1）曾富理神（上四六ウ4）

登富志郎女（中六八ウ5）

ロ、本　美賀本斯（下六ウ3）宇良胡本斯祁牟（下四三オ6）邇本杼理（中六五オ3）美本杼理（中七一オ1）久爾能麻本呂婆（中五五オ3）本都毛理（中七二ウ7）余曾多本毘売命（中一六ウ4）

3、混用のあるもの

イ、富

人名　意富富杼王（中八三ウ6）（中八三ウ3）

モトホル　伊波比母登富理（中九オ3）波比母登富呂布（中九オ3）

ロ、本

意富本杼王（下一八オ6）
c.f. 袁本杼命（下四八オ3）
（下四八オ5）
斯麻理母登本斯（下四三オ3）

4、検討を要するもの

イ、「ほと」（陰）は、

富　富登（上二三ウ6分）（中一〇ウ3）（中一〇ウ6）（中一一オ1分）（中一五ウ6）

番・蕃　番登（上二五ウ6）（上八オ4）

となっており、「番・蕃」が「富」の類であれば問題はない。ところが、「番」の字は「ホノニニギノミコト」によくつかわれ、この「ホ」は「火」の意であるから、その所属が決定してからでないと甲・乙をきめられない。

ロ、「ほ」（火）は、

本那迦（火中）（中五一オ5）

の例があり、また、火中からうまれたニニギノミコトは、

番仁岐命（序一ウ2）日子番能邇邇芸命（上五八オ6）（上五八ウ1）（上五八ウ3）（上五八ウ5）（上六〇ウ1）（上六二ウ5）

とあり、また、「火中所生故其御名宜称」とある「ホムヂワケ」も、

本牟智和気（中三七ウ1）

とあるから、ホ（火）は本の類であり、番もそれに属するかの様である。また同様に、

本牟多能比能美古（中七三ウ5）

も「火」の意であろうし、「品」字をつかう、

品牟都和気命（中三一ウ7）

品遅部（中二三ウ1分）（中四〇オ3）（中四一オ5）

品遅君（中二四ウ4分）

品陀天皇（中八三オ7）（中八四オ3）

品陀和気（中六〇オ1）（中六七オ3）

品陀真若王（中六七オ4）（中六七オ6分）

品太天皇（下四八オ2）

品夜和気（中五九ウ7）

品陀御世（序四オ2）

などもみな「本」の類とするもののごとくにおもわれる。

なお「仁番」（中七五オ5）もこのなかにいれる。

ハ、ほぐ（祝）は、

本岐母登本斯（中六六オ7）（中六六ウ1）登余本岐（中六六オ7）本岐玖流本斯（中六六オ7）（中六六オ7）本岐歌（下一二ウ7）

加牟菩・岐本岐玖流本斯（中六六オ6）

とあるから、菩も本の類であるらしい。神名には、

天之菩卑能命（上二一オ5）天菩比神（上二二ウ2）（上四九オ4）（上四九オ5）（上四九ウ1）

とある。

これからみると、番・蕃・品・菩のいずれも本の類、すなわち甲類であるかのごとくにみえる。

七

しかし、ここでまた別の方面からこの問題を検討してみる。まず漢字音においてどの様な相異があるか。

"Grammata Serica" と『上古音韻表稿』によってしらべてみると、（頭音省略）

		韻鏡	K氏	藏氏
富	宥(尤)韻三等		jiŭg- iəu- u	jiwəg(→jeu)
本	混(魂)韻一等		wən- uən- en	wən(→uen)
番(蕃)	元韻三等		jiwən- jiwən- an	jiwən(→jiwar)
品	寝(侵)韻三等		liəm- jəm- in	jəm(→jəm)
菩	模韻一等(酺)		wo- uo- u	wəg(→uo)

となり、富と本との中心母音における差ははっきりせず、結局介母iの有無にある様である。そうおもって他の語をみると、

富 番 品 ɨぎう 三等

本 菩 ɨおし 一等

ということになる。富を乙類、本を甲類としてよいであろう。富・番・品は介母iによって中舌性がつよくなることであろう。さて、この結果とさきほどの結論とはくいちがいがある。すなわち、番品をさきには本(甲)類にいれたが、漢字音からは富(乙)類にいれた方がよさそうである。それで、さきほど、番品を本(甲)類にいれた根拠をふりかえってみると、「ホ」(火)を本(甲)類にいれたことにあったのに気づく。それは、本那迦(火中)本牟智和気(人名)本牟多能比能美古(人名)の三例を正用としたことにあったが、これを誤用とすれば、番でかく七例、品でかく十四例が正用となり、また番(蕃)登の二例も正用となってくる。誤用は本字でかくところにのみおきていることになる。

濁音は煩の字のみであるが、これは並母元韻三等であるから、番の字とおなじ母音で、やはり乙類が本来であろう。用例は、

淤煩鉤(ただし注には「於」とある)(上六八ウ)
比波煩曾(一般細の義という。すれば、一はその濁音であろう。)(中五二ウ5)
能煩野(中五五オ2)、能煩理(下六オ1)能煩礼婆(下六オ1)美夜能煩理(下六オ7)和賀能煩礼婆(下六ウ1)伊毛登能煩礼波(下十一オ4)能煩理斯(下三五オ5)

である。

八

以上によって、富は乙、本は甲ということが決定したが、そうしてみると、まだ大部分まもられている意富というかなづかいからして、意は乙類とすべきであろう。そして淤は甲類ということになり、さきほどのオの表を、甲乙をはっきりさせ、甲オをo、乙オをöであらわして、正誤を判定して整理すればつぎのごとくなろう。

淤 (甲o)

正用	of(u)	生ふ	6
	ot(u)	落つ	5
	osïrö	人名	4
	of(e)	覆ふ	3
	okami	神名	3
	of(a)	負ふ	2
	oyi(ru)	老いる	1
	*os(ï)	押し	1
	**os(öburafi)	押す	1
	or(ösu)	織る	1
	omidu	神名	1
誤用	o(re,no)	汝	6
	omi	臣	4
	osufi	襲	3

意 (乙ö)

正用	öke	神名	2
	ösu	神名	1
誤用	ö(re,no)	汝	2
	ömi	臣	2
	ösufi	襲	2

正用	öfökimi	大君	7
	öfö	大	39
	öföne	大根	1
	öfömiya	大宮	1
誤用	ömöf(a,i,)	思ふ	7
	öki	沖	6
	ök(i)	置く	3
	ofökimi	大君	3
	ofö	大	2
	oföne	大根	1
	ofömiya	大宮	1
	omöf(i,u,ë)	思ふ	3
	oki	沖	1
	ok(i)	置く	1
	otö	弟	1
	omö	面	1
	otö	山名	1
	obö(ti)	鉤	1

* osïの sïは誤用である。

**os (öburafi)は，osuという動詞の一活用であろう。or (ösu) も，oru—örö となるであろう。他に mafora—maforö yora—yörö という例がある。

ついでにホの表も整理しておく。

甲				乙			
	本		菩		富	番(著)	品	煩
正用	safo	地名 17	•	正用	öfö	大 48		obö(ti) 鉤 1
	izafo	人名 5			**ofö	大 7		
	fo(tuye)	上 3			töför(e)	通る 2		
	fo(dari)	秀垂 3			töfö	遠 2		
	*sifo	塩 1			söfödö	笨山子 1		
	*sïfo	塩 1			söföri	神名 1		
	wozafo	人名 2	fofi 神名 1		töfö(sira)	人名 1		
	fo	百 2	正用	正用				
	fog(i)	祝ふ 6	fog(i) 祝 5					
	fosi	慾し 1						
	nifo	鳥名 1						
	mifo	鳥名 1						
	***maforöba	1						
	fo(tumori)	秀か 1						
	(yösö)tafo(bime)	人名 1						
誤用	kofosi	恋し 1			födö	人名 2		
	fodö	人名 2			mötöföri	1		
	mötöfosi	もとほし 1			mötöförö fu	1		
	fo	火 1		正用	fötö	陰 5	正用 fötö 2	
	fomu(ti)	人名 1			föra		fö(noninigi) 火 7	正用 fömutu 1
	fomu(ta)	人名 1						fömuda 人 8
								fömudi 名 4
								fömuya 1

*** maforöba　fora と関係ある語とすればとöとaの※替か。日本書紀には嚢倍邏嚢 ma fo rama とある。

* 塩のシは，si か sï か不明であるが，ホについては正用であるとみとめる。

** ofö の o は誤用であるが，fö は正用である。

さて、淤と意との漢字音の差異であるが、これは於と意の差異とかんがえてよかろう。すなわち淤は上代においてもめずらしい字であるが、おそらく漢文体中の於の字と区別して、音がなであることをしめすために淤の字をもちいたものと解してよかろう。さて、意・淤（於）は推古朝からもちいられたであろうから、推古朝において、この二字をならべてみたとき、どの様な音の差異となるか。意は志（之）韻三等、淤は魚韻三等であり、結局、之韻と魚韻との差異となる。之韻の字が推古朝において乙類オ列をあらわすに適していたことは、大野氏『上代仮名遣の研究』第三節にくわしいので贅言を要しない。しかし、魚韻の字がオの甲類の音をあらわしているのはやはり問題である。魚韻の変遷についても大野氏の同書にくわしいが、氏は推古朝のケ乙類にもちいられている魚韻を説明せんとして、唐末や方音の資料をもって先人の説を否定し、三国時代には iə、六朝隋唐には iəu という音を推定された。しかし、淤の音を説明するためには、かえって、同書にみえる周法高氏の説が都合がよい。周氏は、魏晋南北朝唐代の魚韻の主要母音を、後舌母音ɔと推定しているからである。勿論こうした問題は御都合主義ではいけないので、なぜ推古朝において、ケ乙類を魚韻であらわし、おそらくおなじ推古朝においてオ甲類にも魚韻の字を用いたか、という点が説明されなければいけないわけで、仮説としてはかんがえるところもあるがまだ発表するまでいたっていない。おおしえをいただければさいわいである。

さてこの項のまとめとして、さきほどの二表からオとホの崩壊状況をさぐろうとおもう。

1、乙類オのみで構成している語根の、はじめのöはoになる傾向がある。

2、甲類オを語頭にもち、第二音節にiuをもつ語根はそのoがöになる傾向がある。これはi（前舌）u（中舌、これについては既述）というせまい母音に影響されたもので、öはoよりくちのひらきのせまい中舌母音であったとおもわれる。

3、一例しかない「弟」「面」「淤縢山」「淤煩鉤」などの語頭の淤は、おそらく1の傾向と規を一にするもので、もとöであったものがoになったのであろう。

4、オの混同は、語頭においてかなりみられ、öよりoへむかう傾向がみられる。

5、一音節語（of ot os）は混同しにくいが、これは音韻の混同がただちに語義の混同に影響をおよぼすからであろう。

6、ホにおいても、混用例はほとんど乙föを甲foにあやまったものばかりであるが、これはまだかずもすくなく、この変化が極初期に属するものであることをものがたっている。

7、オ・ホのばあいは、シとちがって、かなりはっきりと、甲が乙の領域をおかしつつあることがいえそうである。大野晋氏は、「ア行のオはおそらく乙類所属のものである」（『万葉時代の音韻』一一万葉集大成』三〇二）とのべられているが、わたくしの調査では甲類の方が優勢になりつつある、ということになった。

九

以上の論証によって、『古事記』においては、従来しられていたよりも、さらに、シ・オ・ホの三音において甲・乙二類の区別があったとみとめ、それをみとめたうえで発生する若干の問題を

のべ、また音韻変化の様相の一端を推測した。このことから、上代の国語についていろいろな問題がおきるとおもうが、ここではしめくくりとして、ふたつの点だけをのべておきたい。

ひとつは、在来、『古事記』と『日本書紀』『万葉集』というものを、音韻史資料として直線上におき、『古事記』では、音の区別があったもの（モの甲乙）が、他の二書の時代では消滅したということになっていたが、モをふくめた四音の区別がわずかの間に消滅したとはかんがえられない。もっとも、これはiとï、oとöという母音の混同であるから、音韻論的には二音の混同ということになり、爾後の音韻変化と同質のものであるから、それほど不思議とはいえないとおもうが、それにしても、その期間はみじかすぎる。これを説明するには古代社会の構造と文字使用の歴史ということをもう一度かんがえなおさなければなるまいとおもうがこれは稿を別にして論じたい。

ふたつは、上代音韻組織がなぜ変化したかということである。これはつぎの様な仮説をかんがえてみた。古代日本語は非常に簡単な音節数よりなる語がおおかった。一音節か二音節、せいぜい三音節ぐらいの、現在語根とかんがえているものが単位となって文法的なはたらきをしていたとおもう。そういう言語においては音韻の数（みかたをかえれば単音の種類）のおおいことが要求される。fi（日）とfï（火）、ko（子）とkö（木）、yo（夜）とyö（世）とは音がちがっていた方がのぞましい。ことに音節構成の原則の簡単な日本語においては、単音の種類はおおい方がよい。これらの条件のくみあわさったところに古代日本語の音韻組織を維持するちからがあった。ところが、六世紀ごろからはじまった外国文化の急激な輸入によって、文化が進展し、日本人の造語能力が増大し、単語を構成する音節数も増加するし、動詞・形容詞の活用、助動詞・助詞の機能なども発達してきたために、国語の表現機能がいちじるしく増大した。そのため古代日本語では必要であった音韻数のおおさが、ここではそれほど必要でなくなるとともに、かえってわずらわしくなり、そのために類似の音韻の合同（つまり不必要な単音の消滅）がはじまった。これが七世紀にはますます進展し、天武―元明朝ごろにはシ・オ・ホの混同の時期になり、ついでモ以下の諸音韻の混同となったのであろう。

補一、成稿後、宮嶋弘氏より「オの万葉仮名」（『立命館文学』第一一五号）という論文のぬきずりを頂戴していたことに気づいた。これは恐らく寡の背後に音韻の区別をかんがえていないので、拙稿とはかさなりあわないとおもう。

補二、uが後舌でなかったという私説に反するものとして、河野六郎氏に「日本語と朝鮮語の二三の類似」（『人文科学の諸問題』昭和二十四年十一月）という論文があり、上代日本人が朝鮮音のoをuでうつした可能性をあげていられる。しかし、百済記には襲津彦 sötiiko を沙至比跪 satiiku でうつした例もあり（もっともこれは別人だとの説もあるが）、もうすこしかんがえたい。橋本博士のごとく、「前母音、奥母音といふやうな発音部位の前後の関係は決定的のものでなく、……母音の広狭の関係が大切」なのかもしれない。（『国語音韻の研究』ペ一四四）この辺のところはまだ考究の余地がおおいにあることはみとめざるをえない。（おわり）

――東京教育大学助教授――

玉篇と篆隷万象名義について

貞苅伊徳

一、先哲の研究
二、残巻玉篇諸本相互間における異本性
三、残巻玉篇巻廿七と万象名義の共通性
四、通説に対する疑点
五、万象名義は玉篇の摘要に非ざるか

一

篆隷万象名義（以下万象名義と略称する）は、わが国で編纂された字書中現存する最古の本として遍く知られ唯一の伝本である高山寺本が覆製①され、中国においてもこれに依って印行したものが行われている。

覆製本には山田孝雄氏の解説が附いていて、今日においても本書の解題の基準となっている。それによると、本書の価値については、清の楊守敬が古逸叢書本原本玉篇の跋の中で、いま顧野王原本玉篇は見えないけれども、それは日本の釈空海の撰にかかる万象名義にその全きものを見ることができる。分部、所属文字を残巻本玉篇と比較すると一一合うから、かの著は皆野王原本玉篇に拠っており、絶えて増損凌乱がないとまで云っている。そこで楊氏説が正しいかどうかを調査してみると、原本玉篇の残巻をもって部首の順序を見ると正しく一致する。各部における文字の数、順序も極く少数の出入はあるが、大体これによっていることが判る。『次に各字に於ける反切を比するに二種の反切あるは多くはその一をとり、又まゝ直に音を注せる所ありて少しく異なる點あれど、原本に背反せる點は極めて稀なり。次に各字に於ける釋義を比するに、玉篇に詳説せるをば要を採りて記せることは明かなるが、其の順序時に前後せるあり、又往々玉篇に存せぬ釋義を加へたるものを見る。此の故に吾人の見る所は楊守敬と自ら異なり。全篇の組織と標字の採録とは全く原本に據れりといふべきことならむ。しかもその釋義に於いては撰者獨自の見地によりて取舍し、又加へたる所あるべきを思ふものなり』と次に例証数例を示し、更に『本書が原本玉篇の抄錄たるに止まらずして、撰者の特に意を用ゐて編纂せしものとすべきなり。本書を以て原本玉篇の面目を推知する究竟の資料とすべきは吾人も異論を呈せされど、編者の特別の苦心を認めず、單に玉篇の抄出と目する者あらば、反對を表すべきものなりとす』と結んである。

ついで万象名義について論ぜられたものに岡井慎吾氏の「篆隷②万象名義を見て」があり、書誌的な考証が前半を占めている。後半には弘法も誤編の存するものあるを指摘し『又絲部の弁等二字